

以下の五つの資料から読み取った内容を踏まえて、自分の論旨にふさわしい題を解答用紙冒頭の所定欄に記入し、一二〇〇字以内で小論文を作成しなさい。その際、少なくとも三つの資料を取りあげ、言及した資料の番号をすべて解答用紙末尾の所定欄に記入すること。出題にあたっては、原典の一部を変更ないし省略したところがある。なお、注はすべて出題者による。

【資料一】

諸君は二つの時計があつたとして、その間に食違いが生じたとき、一体どうしますか。テレビ等の時報に合わせると答えると思う。では一体テレビの時報は何を基準として放送しているのでしょうか。ということは普段あまり深く考えないと思うが、疑ってみることも無駄ではあるまい。何か基準がなければ、正しいとか狂っているとか言えないのである。その基準とは一体何であつて、どうやってそれを決めて行くのかということが問題である。

さて長さの分割は運動している間に変わらないものがあれば、それをもとにして分割することは可能である。よくやるように、コンパスの二つの先端の間隔が変わらないとして、ある線分を分割するわけである。しかしそれがどうして保証されるのか、考えてみると随分むずかしい問題であることに気が付くと思う。どうやって長さが変わらないことが保証されるのか、コンパスの場合は、何度も驗（たぶ）することができる。つまり、右に動かしたり、またもとへ戻したりすることが可能なのである（それにしても、動かしたときに長さが変わり、元に戻したら、元の長さになっていたとしたらどうしますか）。

しかし時間の場合、過ぎ去った過去はもう二度とやってこない。したがって、何度も驗しようがないのである。長さの場合に較べて、その分だけ余計にむずかしいのである。

原理的なことはこのくらいにして、具体的な時計の歴史をふりかえることにする。昔からいろいろの「時計」が考えられてきた。そのうちの一つに水時計がある。その淵源は古代エジプトにあるといわれる。槽からもれる水の量を測って、それが一定の割合で出てくると仮定して、時間を測るのである。わが国では漏刻（ろうこく）といわれ紀元六六〇年に用いられたという記録がある。

そのほか砂時計というものもある。これは短時間（数分）を測るのに便利で、今でも家庭用のものが市販されている。中央が細

くくびれている容器の中を砂が通過するのに結構時間がかかるので、全部出切ってしまうまでの時間が何分ということで時間の単位にするものである。面倒なことに、これは長時間にはつかえず、何度もひっくり返さなければならぬ。また、ローソク時計というものもある。これはものによつて数時間測ることができるが、こまかい時間が測れないのが欠点であろう。さてこの場合、ローソクが燃える速度は一定であろうか。すなわち、ローソクに刻みをつけておいたものが本当に正しい時間を示すであろうか。疑えばキリがないのである。室温によつて、燃え方が違つてくるであらうし、湿度によつても違つてくるのではないか。また燃え初めと盛んに燃えているときではどうか。途中で一旦消したとき、その後の燃える速度はどうか。要するに、外界の状態が物理的・化学的変化の速度にどういふ影響を与えるかということが問題なのである。これらは、それぞれ物理的・化学的反応速度の問題として個別に扱われるであらう。しかし基準となる時間間隔の測定はなるべく、原理的に簡単なものがよいことはお分かりと思う。複雑なものは、その変化自体が研究の対象となりうるものだからである。

ヨーロッパの古い町へ行くと、町の中心に広場があり、その中心となる建物（たとえば市庁舎等）に時計が置かれているのでくわす。たとえば、ミュンヘンの市庁舎には、毎日午前一一時になると、機械仕掛けの人形行列が回転を始める。くわしいことは知らないが、現在では電気仕掛けで、動くのだと思うし、スタートの時刻は何かの時計を使っているのだと思うが、電氣が実用化されていなかった時代には、それはすべて錘^{おも}り時計で操作されていたようである。錘り時計の原理は、錘りが徐々に落ちるときエネルギーを動力にして、それが余り早すぎもせず、また遅すぎもせず落ちるように、摩擦で調整しているものである。しかしこの摩擦力というものはやつかいで、そう規則通りには働かず、したがつて高い精度で時刻を刻むというわけにはゆかない代物である。

それはともかく、ミラノにある機械時計はこの種のものとしては古く、一三三五年には作られたそうである。一〇分か二〇分の程度の精度はあつたのではないかと想像される。

さて、ガリレイは、ピサの大学生だつた一五八三年に、大聖堂の天井から吊下げられているランプの揺れるのを観察して振子の等時性の発見をしたとされている。伝説によると彼は自分の脈搏^{みやくはく}で、それを確かめたことになっている。そういう問題はア

リストテレス〔注一〕も問題にしておらず、スコラ哲学者〔注二〕の注意をも惹かない問題であり、いわば新しいタイプの問題であった。それはそうであるが、最初に述べた原理的なことはそれほど自明なことではない。どうやって振子の周期が一定であることを認めたのか。彼は自分の脈搏が一定の間隔であることを根拠にしていたようであるが、それは本当だろうか。現在では医者らむしろ時計を用いて脈搏を測り、正常だとか異常だとかいう。

こういうことを考えたならどうであろうか。彼は自分の発見に興奮し、動悸どうきしたとする。異常になったとする。彼が興奮すればするほど、不整脈を示し、彼の発見はあやしくなる。そして「振子の間隔は一定である」ことの発見を断念せざるを得なくなる！

この論理のどこが一体変なのか。ひとつも変なことではない。変なのは一定でないかも知れないものを基準にしているからなのである。すなわち、一定間隔というものは何であるかという根本問題を含んでいることなのである。一定間隔というものは絶対的なものではなく、何かを一定だと仮定したとき、他の現象が一定であるとか、ないとかを論ずることができることを示しているのに過ぎない。

（青木信仰『時と暦』東京大学出版会、一九八二年）

〔注一〕 古代ギリシアの哲学者。様々な領域に足跡を残し、万学の祖と称される。

〔注二〕 キリスト教会の教義を理性的に弁証しようとした中世の学者の総称。しばしばアリストテレスの哲学を援用した。

【資料二】

幕末の一八五七年から二年間、長崎海軍伝習所に滞在し、西洋式の操船技術と科学技術の知識を日本人に伝えたウィレム・カッテンディーケは、その『滞在日記抄』において「日本人の性癖」という一節を書き残している。

そこにはまず、「日本人の悠長さといったら呆れるくらいだ」という文句が一言述べられると、その悠長さを示す事例が次々に紹介されていく。修理のために満潮時に届くよう注文したのに一向に届かない材木、工場に一度顔を出したきり二度と戻ってこ

ない職人、正月の挨拶まわりだけで二日を費やす馬丁〔注一〕など。そして当時の日記には、「日本人は無茶に丁寧で、謙譲ではあるが、色々の点で失望させられ、この分では自分の望みの半分も成し遂げないで、此処を去ってしまうのじゃないかとさえ思う」と暗澹たる思いで認めていたことが、感慨深げに記されている。

彼の心配は杞憂であつた。維新後の日本は近代社会の建設に成功し、それから一世紀ばかりの内に、日本は世界の先進国の仲間入りを遂げた。そして今、日本の鉄道は世界一正確に運行し、工場では資材と時間が極限的に節約され、市場では正しい時刻を永久に指し続ける「電波時計」が発売されている。腕時計を身につけ、数分おき数十分おきに正確な時刻を確認しながら、スケジュール通りに日々の行動が進むよう、現代人は時間を律して生きている。そんな現代社会に生きる日本人にとって、カッテンディーケの印象記は思いもよらぬ言葉であらうし、またそれは、我々の過去について不思議な気持ちを起こさせるものである。

この律儀なオランダ人の悩みは、実は、幕末から明治維新以降に近代日本を建設するために到来したお雇い外国人技術者にとって、ほぼ共通の悩みであつた。彼らは、工場や建設現場で日本人労働者の勤務ぶりにしばしば業を煮やしたが、その主たる原因は、彼らが時間を守らないこと、まるで時計の時間とは無関係に物事が進行する日本人の仕事ぶりだったというのである。

時間との戦いを日々迫られている現代社会において、その目まぐるしく動く活動の大前提となっているのは、人々が時間を守ること、すなわち時間規律を有していることである。我々が当然のこととして受けとめている時間厳守の行動様式が、明治初期には当たり前ではないどころか、それとはほど遠い状態にあつたとするならば、それではいったい、明治以来このかた百数十年の間、日本人はいつ頃どのような経緯を経てそのような時間規律を身につけるようになったのか。

（中略）

明治初年度の日本人の生活のペースを理解するためには、まず、日本人は明治五年まで「不定時法」で時間を計り、日々の生活を営んでいたという事を知っておく必要がある。不定時法とは、昼間の時間と夜間の時間をそれぞれ等分して時間を計測する方法であり、時計の進み方に合わせて一日の時間を一様に等分した「定時法」に対比される。西洋では機械時計が普及する一五世紀に至るまで利用されていた時刻の表示法である。不定時法では、当然のことながら季節によって時間の長さが変わってくる。

従つて、お雇い外国人技師から時計が指す七時に集合するようにと突然命令されたとしても、明治の職人たちはピンと来ないままに厄介な注文をしてきやがるとでも思つたことであらう。

日本には日本独特の和時計が江戸時代に存在した。それはこの不定時法に合わせ、昼夜で異なるペースで時を刻むように工夫された日本独特の時計であつた。しかし、この和時計は大名や富裕な人々だけがもつことができた代物で、一般の人々には縁の薄い時計であつた。かといつて庶民が太陽と月の傾き具合だけから時刻を感じとっていたわけではない。彼らには、不定時法で昼夜の時間を各六等分した時刻に鳴らされる鐘などの音が時を知らせていたのである。「今何時だい」という問いかけに対しても、普通の人なら答えることができる時間システムが、少なくとも城下町の界限には定着していたのである。

ただしその時間の認識の精度は、特別の仕掛けを使つたり注意を傾けない限り、約二時間を表す一刻の時間を分割した三、四〇分程度がいいところだつたらう。要するに、現代人が日常生活を忘れるために時計をもたずにのんびりと休暇を楽しむ時と同じような時間に対する感覚を、江戸時代の人間はもっていたと考えられる。その時間感覚が、明治以降の近代的な社会システムを導入によつて、抜本的な変更を強いられるようになったわけである。

(中略)

それにしても現代の日本人はますます忙しくなっていくように思われる。時間の節約を求められ、時間厳守が徹底されるようになっていく。ミヒヤエル・エンデ〔注二〕の小説『モモ』においては、時間ドロボウなる灰色のコートを着た男たちが現れ、人々の生活が彼らの登場によりますます忙しくなり、せわしなくなっていくことが描かれる。とことん人の話を聞くとというモモは近代以前の時間のあり方を象徴し、灰色のコートを着た男たちは近代の時間のあり方を象徴しているのである。

エンデは晩年に、時間の問題とも密接にかかわる貨幣の問題に取り組み、地域通貨のあり方に關心を寄せていたという〔注三〕。時間を節約し時間の規律を徹底させることの根源をたどれば、それは「時は金なり」という等号関係にたどり着く。現在のグローバル化された経済市場においては、より効率的に作られたより安くより性能のいい製品が市場を支配していく。この単純な経済原理が貫徹されることにより、時間を極限的に節約し、効率化を最大限進めた製造業者が全世界を制覇することになってしま

う。そこで、通貨の流通を地域だけに限定することによって、効率化・時間節約の果てしなき進展を食い止めようとするわけである。

しかし世の中の動きはますますその速さを増し、その傾向は今後も続いていくように思われる。それを象徴するような情報化社会の進展。「二〇年ひと昔」という文句よりもはるかに速く社会の進展は進んでいく。だが速さが増し、細分化された時間の管理がますます要求されてくるとともに、人々の視野は狭く短期的になつていくようにも思われる。米国でコンピュータの開発に携わる技術者の中に、そのような危惧をもつ人々が現れた。彼らは芸術家らとともに、「長い今」というユニークなプロジェクトを始めている。彼らは、加速化された社会に生きる現代人が将来に対して近視的になつていることを憂えて、思いきり長期的な視野を促す象徴的なものを作ろうと考えた。それは、一万年にわたり時を告げる時計であつた。一万年動き続ける時計の設計のために、技術の粋が集められる。果たしてそのような時計が、人類の長期的視野を養うことに一役買うことになるかどうかは、ここではおいておこう。だが、米国の先端産業を担う人々からこのような企画自体が発想されてきたところに、現代社会の深い矛盾が先鋭的に現れているようにも思われる。

(橋本毅彦・栗山茂久編著『遅刻の誕生―近代日本における時間意識の形成』三元社、二〇〇一年)

〔注一〕 馬の世話をする人。

〔注二〕 ドイツの児童文学者。代表作は『モモ』、『はてしない物語』など。

〔注三〕 川邑厚徳他著『エンデの遺言―根源からお金を問うこと』NHK出版、二〇〇〇年。

【資料三】

一日が瞬またたく間に終わる。あるいは一年があつという間に過ぎる。子供の頃はもつともつと一年が長く、充実したものだったのに――。

なぜ大人になると時間が早く過ぎるようになるのか。誰もが感じるこの疑問は、ずっと古くからあるはずなのに、なかなか納

得できる説明が見当たらない。この難問について生物学的に考察してみよう。

三歳の子供にとつて、一年はこれまで生きてきた全人生の三分の一であるのに対し、三〇歳の大人にとつては三〇分の一だけ——。

こんな言い方がある。よく聞く説明だが、はつきり言つて、これは答えになっていない。確かに自分の年齢を分母にして一年を考えると、歳をとるにつれて一年の重みは相対的に小さくなる。しかし、だからといって一年という時間が短く感じられる理由にはならない。

ここで重要なポイントは、私たちが時間の経過を「感じる」、そのメカニズムである。物理的な時間としての一年は、三歳の時も三〇歳の時も同じ長さである。にもかかわらず、私たちは三〇歳の時の一年のほうをずっと短いと感じる。

そもそも私たちは時間の経過をどのように把握するのだろうか。自分がこれまで生きてきた時間をモノサシにして（あるいは分母にして）時間を計っているのだろうか。もしそうなら先の説明も一理あることになる。

でも、これは違う。私たちは自分の生きてきた時間、つまり年齢を、実感として把握してはいない。大多数の人は自分が「まだまだ若い」と思っているはずだし、一〇年前の出来事と二〇年前の出来事の「古さ」を区別することもできない。

もし記憶を喪失して、ある朝、目覚めたとしよう。あなたは自分の年齢を「実感」できるだろうか。自分が何歳なのかは、年号とか日付とか手帳といった外部の記憶をもとに初めて認識できることであつて、時間に対する内発的な感覚は極めてあやふやなものではない。したがつて、これが分母となつて時間感覚が発生しているとは考えがたい。

一年があつという間に過ぎる。時間経過の謎は、実は私たちの内部にある、この時間感覚のあいまいさと関連している、というのが私の仮説である。それはこういうことである。

今、私が完全に外界から隔離された部屋で生活するとしよう。この部屋には窓がなく、日の出日の入り、昼夜の区別がつかず、また時計もない。

この中で、どのようにして私は時間の感覚を得ることができるだろうか。それはひとえに自分の「体内時計」に頼るしかない。

だいたいこれくらいで一日二四時間。七回眠ったからおおよそ一週間が経っただろう。もうそろそろ一カ月が経過した頃かな。そして……とうとう一年。

もちろん、このような生活が、たとえ衣食が足りたとしても、まともに続けられるとは思えないが、これはあくまで思考実験である。

私が三歳の時、この実験を行って自分の「時間感覚」で「一年」が経過したとしよう。そして私が三〇歳の時、もう一度この実験を行って「一年」を過ごしたとする。いずれも自分の体内時計が一年を感じた時点が「一年」ということである。それぞれの実験では、実際の物理的な経過時間を外界で計測しておくとする。

さて、ここが大事なポイントである。三歳の時に行った実験の「一年」と三〇歳の時に行った実験の「一年」では、どちらが実際の時間としては長いものになっただろうか。

意外に思われるかもしれないが、ほぼ間違いなく、三〇歳の時に感じる「一年」のほうが長いはずなのだ。なぜか。

それは私たちの「体内時計」の仕組みに起因する。生物の体内時計の正確な分子メカニズムは未だ完全には解明されていない。しかし、細胞分裂のタイミングや分化プログラムなどの時間経過は、すべてタンパク質の分解と合成のサイクルによってコントロールされていることがわかっている。つまりタンパク質の新陳代謝速度が、体内時計の秒針なのである。

そしてもう一つの厳然たる事実、私たちの新陳代謝速度が加齢とともに確実に遅くなるということである。つまり体内時計は徐々にゆっくりと回ることになる。

しかし、私たちはずっと同じように生き続けている。そして私たちの内発的な感覚はきわめて主観的なものであるために、自己の体内時計の運針が徐々に遅くなっていることに気がつかない。

だから、完全に外界から遮断されて自己の体内時計だけに頼って「一年」を計ったとすれば、三歳の時計よりも、三〇歳の時計のほうがゆっくりとしか回らず、その結果「もうそろそろ一年が経ったなあ」と思えるに足るほど時計が回転するのには、より長い物理的時間がかかることになる。つまり三〇歳の体内時計がカウントする一年のほうが長いことになる。

さて、ここから先がさらに重要なポイントである。タンパク質の代謝回転が遅くなり、その結果、一年の感じ方は徐々に長くなっていく。にもかかわらず、実際の物理的な時間はいつでも同じスピードで過ぎていく。

だから？ だからこそ、自分ではまだ一年なんて経っているとは全然思えない、自分としては半年くらいが経過したかなーと思った、その時には、すでにもう実際の一年が過ぎ去ってしまっているのだ。そして私たちは愕然とすることになる。

つまり、歳をとると一年が早く過ぎるのは「分母が大きくなるから」ではない。実際の時間の経過に、自分の生命の回転速度がついていけない。そういうことなのである。

（福岡伸一『動的平衡』木楽舎、二〇〇九年）

【資料四】

ほうつとする程長い白浜の先は、また目も届かぬ海が揺れてゐる。其波の青色の末が、自づと申し上る様になつて、頭の上まで拡がつてゐる空だ。其が又、ふり顧ると、地平をくぎる山の外線の、立ち塞つてゐる処まで続いてゐる。四顧俯仰〔注二〕して目に入るものは、此だけである。日が照る程風の吹くほど、寂しい天地であつた。さうした無聊〔注二〕な目を睜らせる物は、忘れた時分にひよつくりと、波と空との間から生れて来る―誇張なしに―鳥と紛れさうな割り舟〔注三〕の姿である。

という文章で始まる折口信夫〔注四〕の「若水の話」（昭和二年（一九二七）草稿）は、大正十年（一九二二）と大正十二年（一九二三）の、いずれも夏の沖縄民俗探訪の後で執筆したものである。大正十年は沖縄本島とその周辺、十二年は本島から宮古島を経て石垣島へ渡っている。この二度の沖縄と八重山での民俗探訪は、その後の折口学の形成に大きな影響を与えている。その影響は、二度の沖縄行きがなければ折口学は成立しなかったと言えるほどである。

折口にとつての沖縄は、それ程までに大きな意味をもつのであり、その一つを教えてくれるのがこの「若水の話」冒頭の文章で

ある。折口は沖縄の風景や人々の暮らしぶり、言語や儀礼、芸能などの伝承の中から、ヤマトの古代を実感しようとしているのであり、この文章はそのことをよく示している。折口はこれに続けて「我々の血の本筋になつた先祖は、多分かうした島の生活を経て来たものと思はれる」といい、沖縄の浜辺で得た心象から一気に日本列島の古代へと思いを馳せるのである。

それはどのような「島の生活」かといえは、「村には歴史がなかつた。過去を考へぬ人たちが、来年・再来年を予測した筈はない。先祖の村々で、予め考へる事の出来る時間があるとしたら、作事はじめの初春から獲り納れに到る一年の間であつた」という生活である。

「村には歴史がなかつた」とは衝撃的な表現だが、要は人間がもつた原初の時間意識は、循環的な意識であり、それは作付けから収穫までを一年とするサイクルであつたという。それが後に去年と今年を区別し、対立させて考えるようになり、過去を振り返ることで村落生活に歴史観が現れ始め、また一方では、一年の中に二つの年の型を入れて中元〔注五〕の時期を境に二つに区分するようになったと説いている。

歴史意識の発生は、古代語の「こそ（こそ）」（〔注六〕や「をと」（〔注七〕の意味から導き出しているが、循環的時間観念のサイクルである農作による一年は、おそらく『魏志倭人伝』の裴松之〔注八〕の注にある「魏略〔注九〕に曰く、其の俗正歳四時を知らず〔注十〕、但々春耕秋収を記して年紀と為すのみ」（和田清・石原道博編訳『魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝』岩波文庫）が発想のもとになっていると思われる。

このことはともかく、注目すべきは昭和二年の時点で折口は、歳時伝承は一年という時間の循環の中で成り立っていることと、日本の歳時伝承は、中元の時期を境に一年が二分される両分制という構造的性質があるのを見抜いていることである。一年両分制については、具体例として六月と十二月の晦日の大祓をあげ、また「遠い海の彼方なる常世の国〔注十二〕に鎮る村の元祖以来の霊の、村へ戻つて来るのが、年の改まる春のしるしであつた」のが、後に七月の盂蘭盆〔注十二〕にも先祖の御霊を迎えてまつるようになったと説いている。

折口は昭和五年（一九三〇）と七年（一九三二）に発表した「年中行事―民間行事伝承の研究―」（『折口信夫全集』一七所収）では、

「日本の年中行事に、通じて見られる根本の論理は、繰り返しと言ふ事であつて、民間の行事・風習には、何事によらず、繰り返す事が多い。春やつた事を、夏・秋といふ風に繰り返して行ふのである」とも指摘している。これが折口の説く日本の歳時伝承である年中行事がもつ構造的特質のもう一つである。折口の民間伝承研究は、伝承文化の形成や変遷、また伝承の構造を通時的に捉えようとしているのが特色といえる。

（小川直之『日本の歳時伝承』角川文庫、二〇一八年）

〔注一〕 しこふぎよう。四方を見回し、うつむき仰ぎ見ること。

〔注二〕 ぶりよう。することがなく退屈であること。

〔注三〕 丸太をくり抜いて船体とした船。丸木舟。

〔注四〕 大正から昭和前期の国文学者・民俗学者。歌人・詩人としての感受性と民俗学的手法によって日本文化の基底を探る独創的な学説は「折口学」と呼ばれる。

〔注五〕 旧暦七月十五日のこと。一月十五日の上元、十月十五日の下元と並ぶ三元の一つ。

〔注六〕 昨年以前のこと。

〔注七〕 「をと」とは、「おとし」の「をと」で、一昨年が去年の向こうになった前年を指すように、間を挟んだ彼方の意味。

〔注八〕 中国東晋末から南朝宋初の政治家・歴史家。

〔注九〕 三世紀末ごろに成立した中国三国時代の魏を記録した歴史書。

〔注十〕 倭人には正確な正月（正歳）と春夏秋冬の季節の変わり目（四時）といった暦の知識がないという意味。

〔注十一〕 とこよのくに。古代人が海の彼方にあると信じた永遠不変の不老不死の国。

〔注十二〕 旧暦七月十五日を中心に祖先の霊を迎えて供養する仏教行事。お盆。

【資料五】

子どものころから音楽が好きだったためか、私は音楽から事象を考える癖がある。哲学研究の訓練を受け、医療福祉現場の質的研究を行うようになったいまでも、気がつく音楽のメタファー〔注二〕を用いて考えていることが多い。

しかし音楽は本当に単なるメタファーなのだろうか。リズムやメロディー、ハモるかハモらないか、タイミングが合うか合わないか、（出番で入りそこねて）落ちる、息がもたない、抑揚、歌う、精緻さ、といった楽器を練習していたときに意識していたことは、もしかすると音楽を奏でることだけでなく人間の経験の骨組みを表しているのではないだろうか。そもそも人間の経験は音楽的に組み立てられているのではないか。だからこそあらゆる文化は音楽を生み出したのではないか。

人間はリズムに貫かれている。（中略）自分の生活も他の人たちとの出会いも、さまざまに異なるリズムが折り重なったものであろう。たとえば人との付き合いのなかで、相性の善し悪しや、波長が合うことや行き違いはつねにあるが、それはリズムが合う合わないということでもある。多くの日本語の慣用句もリズムと関わり、たとえば「馬が合う」「拍子抜け」といったものか思い浮かぶ。「息が合う」「二息入れる」「息が詰まる」というように、「息」にまつわる表現は、対人関係や生活のリズムと関わるが多い。リズムを論じた中井正一（一九〇〇—一九五二）は、「間が合う、間がはずれる、間が抜ける、間がのびる」ことに注目した〔注二〕。あるいは自分のリズムと、社会から要請されるテンポが合わなくて、日常がうまく過ごせないということもある。気ばかり焦るが体が一向に動かないというときも、自分のなかでリズムがずれている。つまり他の人とのあいだでも自分のなかでも、リズムがぎくしゃくすることがある。言い換えると、リズムは単数ではない。リズムは複数の線が絡み合ったポリリズムとして生じる。

たとえば、最近私はある小学校の授業を見学する機会があった。生活困難な家庭や、外国籍の子どもが多数所属する学校で、普通級のなかに特別支援の配慮を必要とする子どもも数人いるクラスである（つまりクラスの背景にある状況もまたポリリズムである）。「いちばん大変なクラス」と紹介されて初めて見学したときには大きな混乱のなかにあった。そもそも校舎の玄関をくぐったところで「授業中なのに廊下で競走をしてる子がいるな」と思って二人の生徒を見ていたら、実はそのクラスの生徒だった

のだ。国語の授業のはずだったが、三人の子どもが教室から出たり入ったり、あるいは床に寝転んでいた。他の子どもも騒々しく、担任からの質問に答える声が雑談でかき消される状態だった。このようなときにはそれぞれの子どもがもつリズムがばらばらであり、クラス全体としてはカオスあるいは文字通りのノイズとなる。

ところが一ヶ月後に訪れてみると、前回立ち歩いていた子どもたちも机に向かい、一生懸命作業をしていた(図工の時間だった)。先日廊下で走っていた二人も不器用なのでイライラしながらであつたがそれでもクラスの流れと無関係の行動を取るわけではなかった。校長先生に理由をたずねてみると、一ヶ月のあいだ、担任と副担任が丁寧にその子たちにつきそって語りを聴き取ってきたことが大きいようだった。図工のクラスは比較的自由で、全員が思い思いに工作を進めながらときどき周りの友だちと集まって話しているが、前回とは異なり、状況が把握できないカオスではない。二、三人が集まって自由な会話がメンバーを変えつつ行われても、クラス全体が一つのメロディーを変奏しながら奏でているように、工作をするというテーマは保たれていた。授業が終わるころには、多くの子どもの課題が完成していた。さまざまなリズムが変化しながらも統一されたクラスの流れを作る。ばらばらになることもあれば、調和することもある運動がポリリズムである。

世界はさまざまなリズムがからみあつて流れを作っている。

(村上靖彦『交わらないリズム―出会いとすれ違いの現象学』青土社、二〇二一年)

〔注一〕 隠喩。あるものごとを、明示することなく別のものごとに喩える表現手法。

〔注二〕 中井正一『中井正一評論集』長田弘編、岩波文庫、一九九五年。